

花形落語家出演! 祝第250回記念

念々寄席

15日

20余年の歴史

船橋 大念寺主催

船橋市馬込町、大念寺(浄土宗・大島祥明住職)主催の「念々寄席」は毎月1回開催されているが、今月15日に、記念すべき第250回を迎える。同日は豪華出演者を招いて祝いの記念寄席が催される。

「念々寄席」は20余年の長きにわたり、一度も欠かすことなく開かれ、人々に笑いと平安を届け続けている。全国的にも知名度の高い、伝統の地域寄席だ。

今回の特別ゲストは紙切りの第一人者、林家正

けというところもあったが、何事も続けることが「大事」と話す。

辛抱の甲斐あって、今では毎回120〜130人を越す落語好きが会場を埋める。地元だけでなく、遠方から熱心に駆けつけるファンも多い。「木戸銭の中に10円玉が混じっていることがある。小銭を貯めて、楽しみに待っていてくれる人たちがいると思うとうれしい」と住職。

会場の大念寺はJR船橋から東武野田線で三つ目の馬込駅で下車して徒歩12、3分の場所。同寺はモダンな建物で、美しいゲートを持つ欧州風の外観がひときわ目をひく。一步踏み入ると、天



大島祥明住職(右)と古今亭菊之丞師匠

楽師匠。落語の合間に飄々とした芸風で客の注文に応じ、洒落の利いた言葉の妙と見事な紙切りの芸を披露する。

落語は花形落語家の実力派、近い将来、名人まぢがいなしの声も高い、ご常連の古今亭菊之丞師匠。江戸の風情を漂わせ、品格ある立ち居振る舞いで人気があり、高座の様子は歌舞伎座の檜舞台を見るような華やかさだ。

菊之丞師匠は青春時代を過ごした千葉県への思い入れもあつて、念々寄席をとりわけ大切にしている。「ここに集うお客さんは、すぐぶる反応が良い。心から落語を楽しんでくださっている」と話す。

もう一人登壇の真打ちは受賞歴も多く、実力と人気をめぐみきと上げてきている柳家三三師匠。前座は朝呂久さん。

席亭で伝統文化の振興に多大な貢献を続ける大念寺住職の大島祥明さんによると「落語はお寺の説教話として始まり、噺家の高座は寺の導師さんが座る台のこと。最初は前座や二つ目の稽古場のつもりで始めた。20余年の間には、観客が一人だ

に届くほどの堂々とそびえる柱に高い天上はりゾートホテルと見間違えるほど。

よくあるお寺の落語会とは違い、居心地のよいサロンのような雰囲気の中、椅子席でくつろいで噺が聞けるのも人気のひとつ。入場料である木戸銭は第1回から20年以上変わらず、同寺の好意で300円。大物が揃うこの機会に「念々寄席」の落語会に足を運んでみてはどうだろう。

▼アクセス 4頁「和みの郷霊園」の地図参照。

▽問い合わせ ☎047543956547。

●大島祥明住職の評判の著書『死んだらおしまい、ではなかった』は初版から9万冊を売り上げる静かなベストセラー。「死んだらどうなるの?」「どう生きるの?」「本当の供養とは」などに答える。同寺では大島住職のサイン入り本を購入出来る。▽死んだらおしまい、ではなかった』



(PHP研究所刊) 定価1050円。問い合わせ ☎03323956257)